

十戒の学び

金 俊起・吉川 充

目 次	十 戒 (The Decalogue)	頁
1 . 恵みへの応答、十戒	それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。 And God spoke all these words, saying:	1 - 2
2 . 神の民の在り方	「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、 あなたの神、主である。 "I am the Lord your God, who brought you out of the land of Egypt, out of the house of bondage.	3 - 4
3 . 信仰の原点	あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。 "You shall have no other gods before Me.	5 - 6
4 . 真の礼拝(1)	あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。 "You shall not make for yourself a carved image.	7 - 8
5 . 真の礼拝(2)	あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。 "You shall not take the name of the Lord your God in vain.	9 - 10
6 . 解放の記念日	安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。 "Remember the Sabbath day, to keep it holy.	11 - 12
7 . 信仰の伝え手	あなたの父と母を敬え。 "Honor your father and your mother.	13 - 14
8 . まず仲直りを	殺してはならない。 "You shall not murder.	15 - 16
9 . 心の中の姦淫	姦淫してはならない。 "You shall not commit adultery.	17 - 18
10 . 与えなさい	盗んではならない。 "You shall not steal.	19 - 20
11 . 真実の言葉	あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。 "You shall not bear false witness against your neighbor.	21 - 22
12 . 欲しがる罪	あなたの隣人の家を欲しがってはならない。 "You shall not covet your neighbor's house.	23 - 24
13 . キリストの律法		25 - 26

恵みへの応答、十戒

それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。 出エジプト20：1-2

わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。

マタイ 5：17-18

契約は命懸け：

「モーセは 契約の書を取り、民に読んで聞かせた。すると、彼らは言った。『主の仰せられることはみな行ない、聞き従います。』(出エジプト24：6-7)」こうして神とイスラエルの民との契約が結ばれました。ところで、旧約聖書で「契約を結ぶ」という時の、「結ぶ」の原語ヘブライ語の原意は「切る」「切り離す」「殺す」で、契約を破ったら切り殺して下さいという思いが込められています。契約は命懸けだったのです。

1. 十戒の背景、恵みの御業

契約の基礎となる十戒を理解するためには、外見上の理解だけでなく、イスラエルの民が理解し体験していた、十戒の背景を学ぶ必要があります。

(1) 民の誕生

ヤコブ改めイスラエルの一族がエジプトに移住した時、その数は僅か70人(同1：5)で、まだ民とは呼ばれていません。聖書で彼らが民と呼ばれるのは、移住後3世紀以上もたって、エジプトの王が、「イスラエルの民は、われわれよりも多く、また強い(同1：9)。」と言ったのが最初です。人数は多いけれど、心はまだバラバラでした。

神は奴隷とされているイスラエル人の嘆きを聞かれて、族長たちとの契約を成就し約束を実行する時が来た、と宣言されます(同6：5-7)。

ここで神は、ご自分を「あなたがたの神、主」と示され、イスラエル人を奴隷状態から救い出して、神の民として迎え、族長たちに約束されたカナン之地へ導き入れると言われます。でも目先のことしか見えないイスラエルの民は、自分たちが救い出されるといのに、神に信頼しきれず、なかなかモーセに聞き従おうとしませんでした。

(2) 恵みの御業

その後も神は、十の災害でエジプトを打ち、葦の海を渡る民を助け、荒野でマナを与えて、つばやき続ける人々に、恵みと憐れみを示されました。

民がシナイの荒野で宿営すると、モーセは、すぐ山に登り、神のみもとに行きました。そこで神は、イスラエルを神の民とするために導き出したと告げられます(同19：3-6)。「あなたがたを(ひなをかばって飛ぶ親わしのように)わしの翼に載せ、わたしのもとに連れて来た」という御言葉に、民に対する深い恵みと憐れみが示されています。

次いで与えられた十戒の序文も、「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」という恵みの御業の宣言で始まっています。もっともこの時も、モーセの帰りを待ちかねた民は、金の子牛を造って礼拝して神の怒りを招き、モーセの必死のとりなしによって赦されています(同32章)。

(3) まず恵みが

このように、初めは烏合の衆だったイスラエルの民が団結した民となり、民として神との契約を結ぶまでの過程を見ますと、

いつでも神は、まず先に恵みの御業を示されて、民が恵みに応えることを求めておられます。

民には、戒めを守って契約関係を維持する力はなく、ただ神に信頼し、恵みと憐れみにすがらしかありませんでした。

言葉の解説

2. 十戒の精神、神の支配

イスラエルという言葉自体が「神の支配」を意味するのですが、イスラエルには、歴史上の出来事や自然現象の背後に神の御心を見て、それにどう応えるか考えて自らの歩み方を決める、そういう伝統がありました。神がイスラエルの歴史においてご自身を示されたことから生まれた伝統です。

神はイスラエルの民に、エジプトから脱出できたのは恵みの御業だと宣言されました。民も、自分たちは恵みによって救われ、今生かされている。この神は真の生ける神である、この神に従って行こう。こういう思いで聞き従ったのです。

3. 十戒の内容、信仰と倫理

十戒は、神を愛するという信仰の側面と、隣人を愛するという倫理の側面を併せ持っています。このことは、神がなされたことを見て、ただその通りにしなさいということではなく、「これが、わたしがあなたのために行なったことだ。だからあなたも、感謝の心をもって、隣人のために同じように行ないなさい。」ということです。

つまりエジプトから救い出されたというところに神の恵みを見て、その恵みへの応答として、神を神として愛し、隣人を自分自身のように愛するということです。そういう内容の十戒を基礎に、神と神の民との契約が結ばれたのです。

聖書の共同体は、信仰と倫理を一貫して両立して来ました。そしてその姿勢は、欧米の社会の基本的な人間の生き方として、受け継がれています。

蛇足になりますが、戦後の日本は、欧米の隣人愛や人権思想を真似ようと努力してきました。しかしそれらは、その底流に神を愛し畏れる信仰があってのもので、宗教棚上げ型の日本では、畏れるものがないままに、見せかけの隣人愛や人権思想を求めてしまい、それが現在の混乱の遠因となっています。信仰と倫理は車の両輪なのです。

【律法】

律法の本語、トーラーの本意は「神の教え」で、モーセや預言者などを通して与えられた、神からの指示や教えのことです。だから、主イエスが言われた「律法や預言者」は旧約聖書全体のことです、主によれば、そのすべてが成就されるまでは、効力を失わないのです（マタイ 5：17 - 18）。

(1) 儀式律法

律法のうち儀式に関するものは、主イエスの死と復活と昇天によって成就されました。神殿の幕は、主の死の際に二つに裂け、のちに神殿は破壊されました。

(2) 司法律法

裁判に関する律法は、神政国家イスラエルの滅亡によって効力を全うしました。

(3) 道徳律法

主は、律法の中で大切な第一の戒めとして「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」を、第二の戒めとして「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」を、挙げられました（同22：37 - 39）が、この二つの戒めに集約された道徳律法は、世の終わりが来て私たちが完成されるまで有効なのです。

(4) 十戒

モーセを通して与えられた十戒は、神が道徳律法の基本原則として宣言されたものです。

神の救いの恵みに応える生活が示されているという点で、十戒は、私たちクリスチャンに対しても、必須の意味を持ち続けています。

(5) 律法主義

神は、恵みと憐れみによって民を贖い出して契約を結び、律法を与えられたのに、パリサイ人は、神の国に入る条件として、日常生活での律法（言い伝えも含む）の遵守を強調しました。これが律法主義です。彼らは、自力では律法を守り切れないことに気が付かなかったのです。

神の民の在り方

それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。 出エジプト20：1-2

「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」これがたいせつな第一の戒めです。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。 マタイ22：37-40

十戒は契約の中心：

十戒と呼ばれていますが、原語アセレット・ハデヴァリームは、英語のDecalogueと同じ、十の言葉という意味で、戒めという意味はありません。

十戒は、神が直接お告げになり(出エジプト20：1)、神の指で二枚の石の板に書かれ(同31：18)、そして石の板は、幕屋の中の契約の箱に納められました(同25：10-16)。十戒は契約の中心でした。

1. 十戒の序文(出エジプト20：2)

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」十戒のこの序文は、原文では「わたしは、主、あなたの神である。」という御名の宣言と、「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出した。」という御業の宣言から成り立っています。

(1) 御名の宣言

ここで神が明らかにされているのは、主である神が命じられたものだから、十戒には権威があるということです。ついで神は「わたしは あなたの神である」と付け加えて、十戒が私たちにとって喜ばしいものとなるよう配慮しておられます。「あなたの神」の御前で、私たちは神の民になります。

(2) 御業の宣言

「あなたの神」は「あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出した」お方です。十戒を与えるのに先立って、神は、この恵みの御業に言及されます。イスラエルの先祖たちは、「あの絶望的な状況から逃げられたのは自分たちの力ではない。神の恵みによって救われ、今生きている。この神に従って行けばいいのだ。」と喜んで従った筈です。

恵みによって解放された民は、今後は、この神の愛と恵みに応えてこの神だけを愛し信頼する、そのように契約を結びました。こうしてイスラエル(神の支配)と呼ばれる神の民が出発したのです。

2. 十戒の区分

奴隷の境遇から贖い出された民にとって、十戒は贖い主からの賜物で、新たな束縛ではありません。すでに神の民とされていますから、救いの手段でもありません。十戒は、贖われた神の民の、日常生活の中での在り方を教えるものだったのです。

二枚の石の板に書かれた十戒は、神に対する人の在り方と、人に対する人の在り方の二部に分けられています。

(1) 神に対する人の在り方

あなたには、わたしのほかに、

ほかの神々があってはならない。

あなたは、自分のために偶像を造ってはならない。

あなたは、あなたの神、主の御名を、

みだりに唱えてはならない。

安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。

(2) 人に対する人の在り方

あなたの父と母を敬え。

殺してはならない。

姦淫してはならない。

盗んではならない。

あなたの隣人に対し、

偽りの証言をしてはならない。

あなたの隣人の家を欲しがってはならない。

3. シナイ契約の終わり

(1) 神の民イスラエルの挫折

モーセから士師の時代までは、神の言葉に従って神の民を指導する、神政政治というような形の政治が行なわれました。

ところが民の要求でイスラエルが王国となって、やがて神を無視する王が出るようになると、名ばかりのイスラエル（神の支配）に変貌し、結局、王国は滅んでしまいました。

旧約時代は、肉のイスラエルつまり民族や国家としてのイスラエルという形で、十戒を神との契約の中心に置く、契約共同体だったのですが、神の支配が有名無実となり、神の審きに触れたのです。

(2) エレミヤの預言（エレミヤ31：31 - 34）

このような時代に、エレミヤによって、「新しい契約」の預言が与えられました。前の契約は、神が言葉を授け民がこれに聞き従うというものでした。しかしその契約を民が破った。だから今度は、律法を心に刻みつけて、御心通りに生きる新しい神の民を誕生させるというのです。

4. 新しい神の民の誕生

(1) 主の血による新しい契約

主イエスは「わたしの血による新しい契約（ルカ22：20）」と言われました。モーセによって与えられた契約は生命を約束するもの（申命記4：1）でしたが、誰も十戒を守れず、かえって死をもたらしました。だから主は、律法の要求である血（死）をもって、新しい契約を結ばれたのです。

(2) 新しい神の民としての教会

主イエスはただ一人、神との古い契約を完全に、十字架の死に至るまで、全うされました。その主を十字架の贖い主と信じる信仰の共同体が、新しい神の民、霊のイスラエルとしての教会なのです。

新しい神の民は、律法によっては誰も救われないというところから出発しています。神はそのような私たちを、御子を十字架にかけて赦して下さった。

その御子を私の贖い主と信じた人々の共同体です。

「神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださいました（ローマ9：24）。」

(3) 十戒はキリストによる従順

「あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません（マタイ5：20）。」主は、十戒に従うことを求めておられます。しかしそれは、旧約時代のようなmust（従わなければならない）ではなくて、十戒に完全に従われた主に贖われたことによって、私たちにとってcan（従うように努められる）なのです。神を愛し、隣人を愛そう、神が愛する戒めを守ろうと努められるようになったのです。律法全体と預言者とが、二つの戒めにかかっている（マタイ22：37 - 40）と言われた主によって、そうなったのです。

5. クリスチャンと十戒

主は、二つの大きな戒めという形で十戒をまとめて、神を愛することと隣人を愛することを挙げられました。初代教会は十戒を礼拝の中で唱えました。そしてカルヴァン以後のキリスト教会も、使徒信条と主の祈りと十戒を、礼拝の中で唱えるとともに、教会の教えの基本として来ました。

このうち主の祈りは、今も教会の礼拝で献げられています。しかし使徒信条と十戒については、礼拝で唱えない教会も出て来ており、十戒に至っては、神の民の在り方を教えるものなのに、学ぶ機会さえ滅多にありません。

私たちは、十戒を与えておられるのは何方か、よく考える必要があります。私たちを罪の奴隷の境遇から贖い出すために十字架にかかれた主が、私たちを愛しておられるが故に、この十戒を与えておられるのです。「律法や預言者を^{どなた} 廃棄するためではなく、成就するために来た（マタイ5：17）」という、主の御言葉を思い出しましょう。

信仰の原点

わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。

あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。 出エジプト20：2-3

主は、...ご自分のひとみのように、これを守られた。...ただ主だけでこれを導き、主とともに外国の神はいなかった。 申命記32：10-12

「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』 マルコ12：29-30

第一戒が偶像禁止：

第一戒は、前回学んだ序文と結び付いて、信仰の原点の宣言となります。奴隷の境遇から救い出して下さった恵みの中で、私たちは、すべてを尽くして、私たちの神である主を愛するのです。

「ほかの神々」とは偶像のことです。偶像禁止は第二戒、という誤解が多いのですが、第一戒こそ、偶像禁止の戒めです。

1. あなたには

序文で、神は「あなたの神」「あなたを から連れ出した」と言われました。そしてこの第一戒も「あなたには」で始まります。「あなた」と呼ばれています。イスラエルの民全体が、一人の人格のように呼び掛けられているのです。

イスラエルの信仰を引き継ぐ私たちも、個人としてではなく、神の民として呼び掛けられています。使徒信条では、神の前に独り立って、「我信ず」と告白しました。主の祈りでは、神を信じる兄弟姉妹と共に「私たちの」と祈りました。そして今私たちは、「あなた」と呼び掛けられ、神の民として、真の神にのみ従って生きる道を示されているのです。

2. わたしのほかに

「わたしのほかに」の原語アル・パナイの原意は「わたしの顔の上に」で、そこから、カルヴァンや讚美歌交読文34番の「わが顔の前に」、新欽定訳の before Me という訳が生まれました。

一方「顔」が人格を指すということから、「わたしの顔」は「わたし的人格」つまり「わたし自身」を意味するという事になって、そこから、ルターの「わたしと並べて」や、新改訳の「わたしのほかに」、現代英語訳(TEV)の but me という訳が生まれました。

アル・パナイをどう訳すにしても、第一戒の命じていることは、「あなたには、ほかの神々があってはならない。」ということです。自由の身とされたイスラエルの民は、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、」唯一の神を愛することを求められているのです(マルコ12：30)。

3. ほかの神々が

神以外のものを頼りとする時、それを偶像と呼びます。つまりこの第一戒は「ほかの神々があってはならない。」と言って、神の民が偶像から解放されて生きる、自由の人生の指針を示しているのです。

人類には古くから、身近で自分を危険に陥れそうな何かを恐れて、お守りとして偶像に頼る傾向がありました。例えばアブラハムの生地、カルデア人のウルは月神礼拝の中心地だったそうですし、ヤコブの家族が「耳につけていた耳輪(創世記35：4)」も、お守りだったようです。

主イエスは「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません(マタイ6：24)。 」と言って、富が特に危険な偶像だと教えられました。「金銭を愛することが、あらゆる悪の根(テモテ6：10)」となるのです。

お守りや富だけでなく、もし私たちの心の中に、神とは別に、何か頼りにするものがあるとすれば、あるいは、神より大切な何かがあるとすれば、それが偶像です。学歴・地位・家族・名誉から、快樂・まじない・占いに至るまで、それで不安を癒そうとしているのなら、それが「ほかの神々」なのです。

4. あってはならない

「あってはならない」の原意は、「あるはずがない」ということです。神は、民をエジプトの国から連れ出すために、寝ずの番までされました（出エジプト12：42）。民をご自分のひとみのように、わしがひなを守るように守られ、ただ一人で導かれました（申命記32：10 - 12）。わたしはそういう神なのだから、そのわたしと並べて「ほかの神々」を持つはずがない、と言い切っておられるのです。

5. 信仰の原点

主イエスが一番たいせつな戒めとして挙げられた「あなたの神である主を愛せよ。」は、一枚目の石の板に書かれた四つの戒めの要約であると同時に、第一戒の、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」を指し示しています。第一戒は、信仰の原点の宣言なのです。

神と神の民との関係の在るべき姿がここに示されています。神の民は、神が唯一の贖い主であることを覚え、どんな「ほかの神々」も持たず、神の主権だけを認め、神だけに仕えるのです。この宣言は、あらゆる戒めの根幹をなすものと言えます。

私たちは、もし主なる神に加えて「ほかの神々」を持つようなことがあれば、再び神でない者の奴隷になってしまいます。パウロは次のように書きました。「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい（ガラテヤ 5：1）。」

言葉の解説

【してはならない】

日本語の十戒は、「してはならない」という具合に、禁止命令の形で訳されていますが、ヘブル語の原文は、未完了形の動詞を使った、断言命令という形で書かれています。

断言命令というのは、英語のYou shall notに近い表現で、するはずがないと断言するのです。この形で第一戒を意識するとこうなります。「わたしは、主、あなたの神であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出した者である。あなたがそのことを本当に知っているなら、あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があるはずがない。」

第二戒もこうなります。「わたしは、主、あなたの神であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出した者である。あなたがそのわたしの愛を本当に知っているなら、あなたは、自分のために、像や絵を造るはずがない。」

人に対する人の在り方も、同じことです。「わたしは、主、あなたの神であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出した者である。あなたがそのわたしの愛を本当に知っているなら、あなたは隣人を殺すはずがない。姦淫するはずがない。盗むはずがない。偽りの証言をするはずがない。隣人の家を欲しがらざるはずがない。」

つまり、「神の愛の深さ、恵みの大きさを本当に知っているのなら、そんなことをするはずがない」と断言しているのです。

神が「わたしは、主、あなたの神であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出した者である。」と言い、「そのことをあなたが本当に知っているならば、つまりわたしがそのようにしてあなたを愛しているということ、そしてあなたに信頼し期待しているということ、本当にあなたが知っているならば、そんなことをするはずがない」と断言しておられるのです。こういう愛と信頼の人格的な関係を前提として、十戒は与えられたのです。

真の礼拝(1)

あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。

出エジプト20：4-6

神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。

ヨハネ 4：24

真の神の偶像化を禁止：

第二戒は、偶像崇拜禁止と誤解されて来たため、第一戒との区別が曖昧になっていますが、原文は、「ペセル(彫像)もテムナー(肖像画)も造るはずがない」で、神ご自身の姿を像とか絵とかに表わして、礼拝することを禁じています。第一戒は、真の神以外の神々を持つことを禁じ、第二戒は、真の神の偶像化を禁じているのです。

1. 偶像(彫像や肖像画)

当時のエジプトやメソポタミアの人々は、造った像を神格視するほど、素朴ではありませんでした。神々が像の中に取り込めないほど偉大であることも知っていました。それでも彼らは、神々が「天にあるもの(鳥)」「地にあるもの(家畜)」「水の中にあるもの(魚)」などの像に宿ると考えました。モーセが十戒を与えられている最中に、民の願いに負けてアロンが造った金の子牛(出エジプト32章)にしても、別の神を造ったわけではなくて、不安に駆られた彼らが、エジプトから導き出して下さった神の住居か台座として造ったらしいのです。

2. 自分のために

造った像や絵を礼拝の対象とするのは、人が神に(神が人ではなく)直接出会いたいという願望に基づくもので、また造った像や絵に神が宿ると考えることは、被造物である人が造った所に、創造者である神の居場所を決めてしまうということです。

こうなると、神に捧げる礼拝のはずが自分のための礼拝になってしまいます。だから、自分のために偶像を造ると言われるのです。真の礼拝は、人が神と交わるのではなくて、神が人と交わるのです。

3. 偶像を造ってはならない

「あなたがたは十分に気をつけなさい。主がホレブで火の中からあなたがたに話しかけられた日に、あなたがたは何の姿も見なかったからである(申命記 4：15)。」

奴隷の境遇から救い出して下さった神は、霊なる神で、ご自分の望む所で自由に働かれ、人が造った像などでは縛れないお方です。このことが分かっているなら、「像や絵を造るはずがない。」のです。

注意すべきことは、像や絵を造らなければそれでよいかということです。私たちは、御言葉の一部を取り出し強調することによって、自分の思い込んだ形に神をはめ込もうとしてはいけないか。あるとすれば、それも偶像なのです。

4. 拝んではならない、仕えてはならない

「拝む、仕える」は、礼拝するということです。つまり神は、神の像や絵を造ることを禁じながら、その像や絵を、礼拝の対象にしてはならないことを重ねて示され、真の礼拝の在り方を示しておられるのです。

「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」

霊である神を礼拝する者は、像や絵によって礼拝してはならず、御霊と真理である御言葉によって、礼拝しなければならないのです。

5. ねたむ神

「ねたむ」の原語カナーの原意は、熱情をもって愛したのに裏切られ、顔を赤くして怒るということで、ここから「大いに怒る」という意味になりました。どうして神は、こうした激しい言葉をご自身の名として告げられるのでしょうか。

申命記 7: 6 - 8によると、神がイスラエルを選ばれたのは、神がイスラエルを「愛されたから」で、イスラエルが「どの民よりも数が多かったから」ではありません。取るに足りない民を、神は、「恋い慕って」「ご自分の宝の民」とされたのです。

イスラエルの民に、ひたすら愛をお注ぎになったお方だからこそ、神は民に、神だけを愛し、神だけに仕えることをお求めになります。それなのに民が像や絵を造って礼拝したり、ほかの神々を拝んだりするとき、神は激しくねたまれるのです。

そこで神は「わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで」と言われます。とても激しい言葉ですが、私たち人類は、今の私たちの生き方が子孫の生き方を決定してしまうということを、地球環境や天然資源の問題を通して、否応なしに知らされつつあります。報いが三代、四代後まで及ぶということが、現実に起こっているのです。

6. 恵みを千代にまで

咎は三、四代、恵みは千代とあるように、神のご本性は、厳しさよりもむしろ恵みにあります。だからこそ主イエスがお生まれになったのです。

「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施す」とありますが、神を愛するということは、神の愛に応えるということであり、神の命令を守るということは、主イエスが二つに要約された戒め（マタイ 22: 37 - 40）を守ろうと努めることです。

神は、像や絵はもちろんのこと、言葉によっても偶像を造って礼拝しないことと並べて、二つの戒めの実行をも、求めておられるのです。

真の礼拝(2)

あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。

出エジプト20：7

昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ。』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。すなわち、天をさして誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。地をさして誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです。 マタイ 5：33 - 36

三つの戒めの関係：

第三戒は、前の二つの戒めと密接な関係を持っています。第一戒では、神が主以外にあり得ないことが示され、第二戒ではその神が、造った像によっては礼拝することの出来ない、霊のお方であることが示され、そして第三戒では、そのようなお方の御名を「みだりに唱えてはならない」ことを通して、真の礼拝の姿が示されているのです。

1. あなたの神、主の御名

(1) 神聖四文字 **hwhy**：

ユダヤ人は、「主」の原語 **hwhy** を神聖四文字として実際に発音しませんでした。口にさえしなければ、第三戒を守ったことになる、と思ったのです。そこでこの四文字は、「主人」や「主」を意味するアドナイと読み替えられることになり、そのうちにこの四文字をどう発音するのが正しいのか、誰にも分からなくなっていました。

旧約聖書は、ごく一部にアラム語が使われているほかは、全部ヘブル語で書かれています。

ヘブル語は、22個の子音文字を組み合わせて、右から左へ横書きされます。元来は母音記号なしで読まれたものですが、ヘブル語が話し言葉としては死語となった西暦6 - 7世紀頃、マソラ学派の努力によって母音記号が考案され、子音文字の上と下にこれを付けて、旧約聖書の伝統的な読み方を表示するようになりました。

今日のヘブル語旧約聖書はこの母音記号を付けて印刷されていますが、そこで神聖四文字 **hwhy** は、**hwhy** と母音記号を付けて表示されています。この **hwhy** をそのまま無理に読むと、エホヴァになってしまうのですが、これは相当強引な誤読です。

この母音記号は、神聖四文字をアドナイと読み替えるための覚えとして、アドナイ **yhwh** から借りて付けたものですから、エホヴァとは決して読まないのです。ヘブル語辞書で **hwhy** の発音は、アドナイとなっています。

16世紀の宗教改革で聖書の翻訳が進められた際、**hwhy** を、強引にエホヴァと読んだ人がいました。1611年の英欽定訳はこれを採用してYehovahとし、文語訳もエホバと訳しましたが、現在では、これは間違いで「ヤハウエ」か「ヤーウエ」が正しい発音に近いとされています。新改訳では「主」、最近の英訳ではThe Lord、と訳されています。原語はアドナイと発音しますが、この学びでは本来のアドナイとの混同を避けて、主またはヤハウエと書きます。

(2) 主の御名

主の原語ヤハウエは、ただ神にだけ使われている固有名詞です。モーセが神にその名を尋ねたとき、神は、「わたしは、『わたしはある。』という者である。」と仰せられました(出エジプト 3：14)。「わたしはある」エヒエは、本来、過去も現在も存在し、未来にも存在する、という意味の言葉で、神が永遠から永遠まで自ら存在される唯一のお方だということを表わしています。

「主」ヤハウエという言葉は、「わたしはある」エヒエに由来するもので、主がモーセを励まして言われた「わたしは、あなたとともにいる（同 3：12）。」がその真意をよく示していると言えます。かつて族長たちは、自分たちを守る「全能の神」の力を経験しました。今やその神が、神の民を救い出して、契約を成就されるお方であることを「わたしはある」という言葉で示しておられるのです。

主がこの御名をモーセとイスラエルに啓示されたのは、信仰をもって神に应答するようにという呼び掛けでもあります。主は「わたしの名を全地に告げ知らせる（同 9：16）」ことを求めておられます。「私は、御名を私の兄弟たちに語りかけ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう（詩篇22：22）。」とあるように、御名は証しや祈りや賛美で用いられ、さらに広く語り伝えられるのです。

2. みだりに

「みだりに」の原語ラシャヴの原意は、^{むな}虚しく、偽りのために、悪のために、ということです。

「みだりに唱えてはならない。」は、御名を軽々しく唱えたり、唱えながら偽って誓ったり、御名によって呪ったり、することを戒めているのです。もし神の民が誤って御名を汚すと、御名は、それにふさわしい尊敬を得られなくなり、ご意図を妨げることになってしまいます。

(1) 軽々しく唱えない

英語にGod knows（誰も知らない）とかgoddamn（畜生）という言い方があります。カルヴァンも、「御名は、頻繁に、雑然と、雑談の中で汚されている。」と嘆いています。このような御名の使い方は日本語にはありませんが、安心は出来ません。自分の思い通りにことが運ばないと、すぐ神の名を口にして愚痴るのも、「恵みと憐れみ」とか「兄弟愛」というような言葉を口先だけで使うのも、同じことです。神の恵みが分かっているのなら、御名を軽率に使うはずがないのです。

(2) 偽って誓わない

自分の言葉が真実であることを保証するために、神の御名を使うことがあります。こうした上でその誓いを破ったり、無理を承知でそう誓ったりする、これが偽りの誓いです。偽りの誓いを禁じる第三戒によって、契約社会は成り立っています。

安易に誓うことは、結局は、自分の言葉を信用させるために神の名を利用することです。これでは神を神としてあがめていることになりません。山上の説教で、主イエスはそこを突いておられるのです。神の恵みが本当に分かっているなら、そういう誓いをするはずがないのです。

3. 主の御名を、みだりに唱えてはならない

(1) 本来の意味、縛られないお方

第二戒で像を造ることが神を縛ることになるので許されなかったのと同じように、第三戒では、自分の利益のために御名を使うことが禁じられています。主は民のそばに臨在されますが、全く自由であり続け、人間に縛られるお方ではないのです。

(2) もう一つの意味、心からの賛美

第三戒は、御名を唱えなければよいと言うものではありません。そうではなくてむしろ、いのちに至る神の名の正しい呼び方を求めているのです。姿勢を正して御名を呼ぶことを勧めているのです。そういう意味で第三戒は、主の祈りの中の「御名があがめられますように。」に通じているのです。主イエスの救いによって御名を呼ぶ自由を与えられた私たちは、御名を心から賛美します。

真の神の名を呼び、御名を心から賛美するとき、祈りと賛美と御言葉の、真の礼拝が成り立ちます。

第一戒では真の神を唯一の贖い主として示され、第二戒では真の神を礼拝する時に像や絵を用いてはならないことが示されましたが、この第三戒では、真の神の名を呼び御名を心から賛美する、真の礼拝の姿が示されているのです。

解放の記念日

安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならぬ。しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にある在留異国人も。それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にあるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。

出エジプト20：8-11

また言われた。「安息日は、人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたわけではありません。人の子は安息日にも主です。」

マルコ 2：27-28

二枚の石の板のつなぎ：

神に対する在り方の最後に、創造と解放の御業を感謝して安息日を守ることが示されます。解放された喜びが、第二の石の板の戒め、隣人を愛する生活の出発点となるのですから、第四戒は、二枚の石の板のつなぎとなっているのです。

これほどに大切な安息日が、やがて極端に形式化されて、パリサイ人たちが主イエスを葬り去ろうと考え始めるきっかけとなります(マルコ 3：6)。

1. 安息日を覚えて

第四戒の原文の直訳は、「覚えよ、安息の日を。それを聖別するために。」です。「安息日」の原語シャバットは、「やめる」という動詞から来た言葉ですから、この日は、ただ休む日ではなく、今までしていたことをやめる日なのです。その日を他の日と区別して、働くことをやめ、神のための日として取って置きなさい、というのです。

2. これを聖なる日とせよ

安息日を他の日と区別して、神のための日として取って置く根拠を考えてみますと、

(1) 創造の御業を覚えて感謝する日

安息日は、「天と地と海、またそれらの中にあるすべてのもの」が神に造られていることを、覚えて感謝する日です(出エジプト20：8-11)。

創世記1章によると、造られた一つ一つを「神は見て、それをよしとされ」ました。造られたすべてのものは、神によって「よしとされた」ものです。その「よしとされた」ものの中に、この私も入っているのです。この祝福があつての存在であることが私たちに、人生を生き抜く勇気を与えてくれます。

(2) 解放の御業を覚えて感謝する日

安息日は、イスラエルの民を奴隷の境遇から解放して下さった神の「力強い御手と伸べられた腕」を覚えて感謝する日でもあります(申命記5：15)。

解放されたことへの喜びは、「息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にある在留異国人」にも、向けられます。安息日には、彼らも「仕事をしてはならない」のです(同5：14)。

(3) 喜びの日

時が経ち、安息日が何もしない日として形式的に守られるようになった時代に、「喜びの日」の預言が与えられました(イザヤ58：13-14)。

もし、あなたが安息日に出歩くことをやめ、わたしの聖日に自分の好むことをせず、安息日を「喜びの日」と呼び、主の聖日を「はえある日」と呼び、これを尊んで旅をせず、自分の好むことを求めず、むだ口を慎むなら、そのとき、あなたは主をあなたの喜びとしよう。「わたしはあなたに地の高い所を踏み行かせ、あなたの父ヤコブのゆずりの地で、あなたを養う。」と主の御口が語られたからである。

この日を、ただ休む日ではなく、「喜びの日」、「はえある日」、主への愛を表わす日、として正しく守るなら、主の契約が実現され、主のものとして養い育てられるということです。

3. 安息日の宗教儀式化

バビロン捕囚の頃から、信仰の純粹性を守るために、割礼と安息日を守ることが特に強調され出しました。その結果、戒めの精神はかえって忘れられ、安息日は、宗教的儀式としてますます形式的に守られるようになりました。主イエスが来られた頃は、安息日に39もの禁止項目が付け加えられて、重荷となるばかりか、十戒を通して示された、神の恵みを否定するようになっていたのです。

4. 安息日論争

パリサイ人たちが、安息日は何もしてはいけない日だと決め込み、何もしないようにしていたのに、主イエスの弟子たちは、安息日に麦の穂を摘むし、主も、安息日に、片手のなえた人を直されました。

パリサイ人から見れば、麦の穂摘みは禁止項目の刈り入れに当たります。病人の治療も、死にそうな場合に限って許されるものでした。

それに対して主は、安息日は本来「人間のために設けられた」ものであって、それを守るために餓死しなければならない、というようなものではない。安息日の戒めを文字の上だけで守って、自分の安心を求めるよりも、病人の悩みを自分の悩みとして受け止め、その「いのちを救う」ことの方が、御心にかなうことだ、と宣言されました（マルコ 2：23 - 3：6）。

第四戒には道徳律法と儀式律法の両面があって、道徳律法は終末の日まで有効ですが、儀式律法は、主が来られるまでの暫定的なもので、「次に来るものの影（コロサイ 2：17）」と呼ばれるものです。だから主は、主が来ておられるのに、古い影の形式に固執しているパリサイ人を退けられたのです。

5. クリスマンと主の日

(1) 新約聖書の中の主の日

初代教会が「週の初めの日」を「主の日」として守り始めたことは、新約聖書では、コリント16：2、使徒20：7、黙示録 1：10に書かれています。「人の子は安息日にも主です。」と宣言された主が復活されたことを通して、彼らは、形式的に安息日を守ることから自由になり、主の復活の記念日である「週の初めの日」に集まるようになったのです。これは安息日の廃棄ではなく、完成です。

(2) パンを裂くために

使徒の働きで弟子たちは、パンを裂くためによく集まっています。このパン裂きは、御国での安息を望み見ながら、主の復活を祝い、主が共におられることを喜ぶ交わりでした。彼らは「週の初めの日」つまり日曜日に集まって、「主の晩餐」を行ない、パンを裂いていたのです。

(3) 安息日と主の日

安息日は創造と解放という既に与えられた恵みを喜び感謝する日でしたが、主の日はそれとともに、私たちに約束された完全な安息（＝究極的な解放）を望み見て感謝する日でもあります。

私たちは、罪赦された者ではありますが、まだ罪から完全には解放されておらず、再臨の日に、もう罪を犯さないで済む、全く新しい状態に変えられるのを待ち望んでいます。だからこそ、神の方を向いて生きることによって平安を与えられ、そこから隣人の方を向いて生きられるのです。

現在日曜日は、土曜日と一緒に週末と呼ばれて、働かないで、休養をとったり、楽しんだりする日となっています。

しかし本来「主の日」は、「週の初めの日」で、肉体的な休日ではなく、霊的安息の日、この世のものにすぎらず、神に拠り頼む日、主の民と共に集まる日で、この日が主に属することを認める者だけが、この日を正しく過ごす人となれるのです。

信仰の伝え手

あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。 出エジプト20：12

聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい(語り聞かせなさい)。 申命記 6：4 - 7

それなのに、あなたがたは、『だれでも、父や母に向かって、私からあなたのために差し上げられる物は、供え物になりましたと言う者は、その物をもって父や母を尊んではならない。』とっています。こうしてあなたがたは、自分たちの言い伝えのために、神のことばを無にしてみました。 マタイ15：5 - 6

十戒の聞き手は成人：

「あなたの父と母を敬え。」と聞くと、子供に聞かせる戒めと早合点しそうですが、もともと十戒は成人に告げられたのですから、第五戒も、子供ではなく成人に告げられたものです。そうだとすると、成人した子が敬う父や母はどのような存在かが問題になってきます。その点を突き詰めて行くと、この戒めが人に対する在り方の最初に置かれている意味も分かってきます。

1. 敬え

「敬う」の原語カバドの原意は「重んじる」で、旧約聖書では、神を敬う、王を敬う、祭司を敬う、預言者を敬う、という形で使われる言葉です。その言葉が父と母に使われているのです。

私たちの思いと言葉と行ないによって、父と母に尊敬と服従と感謝を表わすことが、この戒めでは、求められているのです。

2. 父と母を

現代の成人が「父と母を敬え」と言われると、年老いて何の役にも立たなくなり、自分たち若い夫婦にとって重荷に感じられるようになって、両親は大事にしなさい、と理解するかも知れませんが、そういう意味がない訳ではありませんが、この戒めは、もっと深いことを教えているのです。

旧約聖書では「父と母」は、子供を生んで育てるから、あるいは知識や経験があるから、親なのではありません。神の恵みを正しく伝え、信仰によって養育して、神の代理人としての務めを果たすから、親なのです。だから「父と母」を敬うことは直ちに神を敬うことに結びつくのです。

申命記 6：4 - 7は、御言葉を子供たちに繰り返して教え、四六時中語り聞かせなさい、これが親の務めだと教えています。恵みと信仰を伝達する責任を負うところに、「父と母」の権威があるのです。

こうして「父と母」が家庭において神の代理人となって、「父と母」を敬うことが直ちに神を敬うことに結びつくから、この戒めは、人に対する在り方の最初に置かれているのであり、これを神に対する在り方の一つと数える人も出てくるのです。

3. 父と母を敬え

神の恵みの語り手であり、信仰の伝え手である、父と母を最後まで敬う。それがこの戒めです。それなのに父や母をもてなさず、その分は神に献げてしまったと言え、父や母に差し出さなくても済む、と教える人がいました(マタイ15：3 - 6)。この欺瞞はパリサイ人だけのものではありません。この戒めをちゃんと守れる人は一人もいない、と言えるほどに、私たちも、理屈を付けて親から離れようとする誘惑に、絶えずさらされているのです。

4. あなたの年齢が長くなるためである

出エジプトの物語はただの昔話ではありません。私たちの家族の歴史も、神が与えて下さった救いの歴史の中にあります。

「父と母」がこの救いの恵みを繰り返し語ることによって、子供は、今生きている人生、その人生が営まれている場所を、神から与えられたものとして受け取り直して行くようになります。これが、「主が与えようとしておられる地で、あなたの年齢が長くなるためである。」という約束の意味です。

5. 「父と母」は父と母だけか

「父」の原語アヴの原意は、教え養い導く者で、アヴは、父、先祖、長という意味で使われるほか、「母」エムとともに、相談役や庇護者としても使われています（創世記45：8、士師記5：7）。

これは、常に侵略の危険にさらされていた当時の人々にとって、その土地を守るため、家族単位では親に従うこと、部族単位では族長に従うことが必要だったことと関係があるかも知れません。

それで古くから第五戒は、両親だけでなく「上に立つ権威（ローマ13：1）」への従順を求めているとされてきました。「存在している権威は、すべて神によって立てられたもの（同）」という訳です。ジュネーヴ、ハイデルベルク、ウェストミンスター等の信仰問答もそのように教えています。

6. 主にあって（エペソ 6：1）

権威に従うといっても、例えば「上に立つ権威」から御言葉に反することを強要されても、従うのでしょうか。第二次大戦の時、多くのクリスチャンがこの難問に直面しました。

聖書は「主にあって」従うことを求めています。神に立てられた権威が、与えられた権威の枠を超える時は、「人に従うより、神に従うべきです（使徒5：29）。」そしてその人々のために、執り成しの祈りを献げるのです（テモテ 2：1）。

まず仲直りを

殺してはならない。 出エジプト20：13
昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会で引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。 マタイ 5：21 - 24
兄弟を憎む者はみな、人殺しです。

ヨハネ 3：15

殺す：

旧約聖書には「殺す」という意味の動詞が幾つかあって、100回以上出てくるのも、三つあります。第六戒で使われているラーツァハは、47回しか出てきませんから、使われ方の少ない方です。

ラーツァハは、英語のkillよりmurderに近く、共同体の意思に反する不法な殺害、つまり個人的な仇敵の殺害に使われた言葉です。ですから第六戒は、神の恵みに根ざした共同体に生きる者は、自分勝手に人を殺して、結局は殺し合うようなことにはならないのだと教えているのです。

創世記 9：6によると、すべての人は神のかたかに造られたので、その生命を傷つけることがあってはなりません。これが神の原則的な命令です。ですから第六戒は、神から与えられている生命の尊さを教える戒めなのです。

1. 殺してはならない

すでに学んだ形で第六戒を意識すると、「わたしは、主、あなたの神であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出した者である。あなたがそのわたしの愛を本当に知っているなら、隣人を不法に殺すはずがない。」となります。

人の生命は、神の御手の内にあるものですから、その生命を隣人から奪うということは、第一戒に反して神に代わろうとすることになります。だから神の民は、隣人を「不法に殺すはずがない」のです。

2. 殺さなければよいのか

律法学者やパリサイ人は「殺してはならない。」という第六戒に、「殺す者はさばきを受けなければならない。」という律法を結び付けることによって、戒めの趣旨を、「殺人をすれば、裁判官による処罰を受ける。」ということに限定してしまいました。それに対して主イエスは、「殺さなければよいのではない。兄弟に対して腹を立てたり、『能なし。』とか『ばか者。』と言うのも、殺すのと同じだ。」と言われたのです。「殺してはならない。」という戒めは、殺人だけでなく、私たちの心の中にある怒りも含んでいるというのです。律法学者やパリサイ人による誤った律法解釈と、主による真の律法解釈とが、ここに対比されています。

この点についてハイデルベルク信仰問答は、「神は殺人を禁ずることによって、われわれに、嫉妬、憎悪、怒り、復讐などを、殺人の根として憎み、これらのことは、みな、神のみ前においては、ひそかなる殺人である、ということをお教えになっておられるのです。」と解説しています。

私たちは、自分は人を殺しはしないと思い込んでいますが、嫉妬が憎悪となり、怒りとなり、さらに復讐から殺人に至ることを思うと、自信など吹き飛ばしてしまいます。これが主の示された律法の精神で、このことに気付いた時、罪の自覚が生まれるのです(ローマ 7：9 - 10)。

3．悪い者に手向かってはいけません

殺人の第一の根を嫉妬とすると、第二の根が復讐です。危害を加えられたらそれ以上の仕返しをする復讐の応酬を防ぐために、「目には目で、歯には歯で。」という復讐の限度が定められました。ところが律法学者やパリサイ人は、復讐を防ぐためのこの規定を「目には目を、歯には歯を」報いるべし、という復讐を勧める規定にすり替えてしまいました。

それに対して主イエスは、「悪い者に手向かってはいけません。」と言われました。自己否定こそがさらにひどい復讐を防ぐ道で、これが律法の本質だということです（マタイ 5：38 - 42）。

4．自分の敵を愛し

それでは悪人に手向かわずに何をしたらよいか。主イエスは、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい（同 5：44）。」と教えました。たいせつな第二の戒め、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ（同22：39）。」の隣人には敵も含まれる、ということです。

もともと十戒には、こういう霊的内容が含まれていたのに、見落としたため解釈を誤ってしまった。そこに主が正しい光を当てられたのです。

5．互いに生かし合う

第六戒について主イエスが教えておられるのは、殺すなとか、憎しみを心の中に隠し持つな、というだけではありません。、兄弟と正しい関係に戻れるよう、積極的に踏み出せと教えておられるのです。憎しみを隠し持ったままでは、どんな礼拝の行為も神の前で何の価値もないから、神を待たせてでも、仲直りは急がなければならないのです。

このように、主の教えを通して見ると第六戒は、「殺さない」ことよりも「生かす」ことに、重点が置かれていることが分かります。私たちは、神のかたちに造られた者として、互いに生かし合うことを求められているのです。

心の中の姦淫

姦淫してはならない。 出エジプト20:14
『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。もし、右の目が、あなたをつまずかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです。また『だれでも、妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ。』と言われています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです。

マタイ 5:27-32

姦淫:

「姦淫する」の原語ナーアフは、夫婦のどちらかが、配偶者以外の異性とも肉体的な関係を作って、結婚生活を壊すことを意味します。

神は、男と女を造られた後で結婚の形を定められました(創世記2:22-24)。肉体的な関係はこの結婚という形の中だけで許されるもので、配偶者以外との肉体的な関係は、神の前で姦淫の罪に当たるのです。この罪に対する刑罰は、男に対しても女に対しても死刑でした(レビ記20:10)。

しかしホセア4:2やエレミヤ23:10を見ると、この罪は、なかなか絶えなかったようです。それに律法を勝手に解釈して、男性が一方的に離婚できるようにしたこともあって、主イエスが来られた頃には、第七戒の重さは見失われていました。

1. 戒めの重さと無責任

「姦淫してはならない。」という戒めは、「殺してはならない。」のすぐ後に置かれていて、犯した場合は死刑です。「姦淫」の問題は、それほど重いものとされているのです。

それなのにイスラエルの人々は、この戒めを守りきれませんでした。イスラエルの人々だけではありません。現代の私たちにとっては、「姦淫」という言葉自体が、死語になりかけています。私たちは、不倫とか失楽園とか言い換えて、自分はしないまでも、そのような話を楽しみます。道ならぬ愛の姿を美しいと感じることさえあるのです。戒めの重さとこの無責任との落差は、いったいどこから来るのでしょうか。

2. 結婚の重さ

「姦淫」の戒めが重いのは、「結婚」が重い意味を持っているからです。でも「愛し合っていたから結婚した」程度で止まっている人には、結婚の重さは分かりません。

自分たちの結婚が神に導かれたものであったと感謝している人は、神を離れては本当の愛があり得ないことを知り、神に導かれた結婚生活を壊すことを避けるはずですが、神からの愛なしに肉体的な関係を結ぶことは、相手を自分のものにしよう、自分が快楽を得ようとするので、主の言われた「情欲」は、こういう思いを指しているのです。

結婚式で読まれる御言葉に、「『それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。』この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。それはそうとして、あなたがたも、おのれの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい(エペソ5:31-32)。」とあります。

ここで勧められているのは、教会を愛する主の愛に倣って、夫婦が愛し合うことです。結婚生活は、その主の愛を受け入れて表わす場なのです。

3. 姦淫してはならない

すでに学んだ形で第七戒を意識すると、「わたしは、主、あなたの神であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出した者である。そのわたしの愛を本当に知っているなら、あなたは、姦淫するはずがない。」ということになります。

結婚は、贖い主であるその神を証人とした契約です（マラキ 2：14）。姦淫の当事者は、愛に生きていと主張するかも知れませんが、姦淫は配偶者に対する裏切りだけでなく、「神が結び合わせたもの（マタイ19：6）」を壊すこと、つまり神との契約に対する裏切りになるのです。私たちにとって大切なことは、その時々「愛と思われるもの」に誠実らしく生きることではなく、神を証人とした結婚の契約に誠実に生き続けることなのです。

4. 心の中の姦淫

律法学者やパリサイ人は、姦淫を禁じるこの戒めを、姦淫の実際行為だけに限定してしまいました。そして、実際に姦淫を犯しさえしなければ、戒めを守っていることになると思い込んでしまいました。それに対して主は、「だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」と言われました。主はここで律法学者やパリサイ人の誤った解釈を、律法本来の姿に戻されたのです。

姦淫してはならないのは勿論です。でも罪は行動だけの問題ではない。心の中であって人を行動へと駆り立てるものも罪なのだ。私たちの心の中に姦淫はないか。空想の姦淫を楽しんではいないか。主はこう問いかけておられるのです。

こう言われて、自分は大丈夫と思える人は一人もいません。自分自身を神の恵みと憐れみに委ねて、私の罪を負って下さった方にただすぎるだけです。主は、姦淫の場で捕らえられた女に言われました。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません（ヨハネ 8：11）。」この御言葉にすぎるしかないのです。

与えなさい

盗んではならない。 出エジプト20：15
人をさらった者は、その人を売っていても、
自分の手もとに置いていても、必ず殺されなければ
ならない。 出エジプト21：16
あなたの同族イスラエル人のうちのひとりを
さらって行き、これを奴隷として扱い、あるいは
売り飛ばす者が見つかったなら、その人さら
いは死ななければならぬ。あなたがたのうち
からこの悪を除き去りなさい。 申命記24：7
何事でも、自分にしてもらいたいことは
ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法
であり預言者です。 マタイ 7：12
盗みをしている者は、もう盗んではいけません。
かえって、困っている人に施しをするため、
自分の手をもって正しい仕事をし、ほねおって
働きなさい。 エペソ 4：28

盗む：

「盗む」の原語ガーナブは、盗み取る、持ち去る
という意味の言葉です。

第六戒から第八戒まで、単純な形の戒めが三つ続
きますが、第六戒と第七戒は、犯せば死罪でした。
第八戒も死罪相当の罪とすると、ここでは人を盗む
ことつまり誘拐を禁じて、お互いの自由を守ること
を命じられていることとなります(出エジプト21：
16、申命記24：7)。

一方イスラエル人は、財産を持ち主自身の延長と
理解していましたので、財産を盗むことは、財産権
だけでなく、人格に対する侵害と考えたようです。

こう見てくると、第八戒は、まず隣人を誘拐して
自由を奪うことを禁じ、さらに財産を盗むことも
禁じている、ということになります。第六戒で生命、
第七戒で結婚、を守ることが命じられたのに対し、
第八戒では、隣人の人格を重んじ、その自由と財産
を守ることが命じられているのです。

1. (人を)盗んではならない

すでに学んだ形で第八戒を意識すると、「わたし
は、主、あなたの神であって、あなたをエジプトの
地、奴隷の家から連れ出した者である。そのわたし
の愛を本当に知っているなら、あなたは、(人を)
盗むはずがない。」となります。

奴隷の境遇から救い出されたイスラエルの人々に
とって、「奴隷であったあなたがたをわたしが解放
したのだから、あなたがたが隣人を奴隷にするはず
がない。」というこの戒めは、特別の意味を持って
いたに違いありません。ここでは、神が贖い出して
下さった人間を、神の愛の中にある者として重んじ、
その自由を守ることがまず求められているのです。

それにイスラエルの民がエジプトに行ったのは、
ヤコブの最愛の息子、ヨセフが、兄たちに売り飛ば
されて、奴隷として連れて行かれたのが発端です。
イスラエルの十二部族は、このヤコブの息子たちの
名前と呼ばれています。つまりヨセフを売り飛ばし
た者の名を付けているのです。この意味でも、この
戒めは、イスラエルの人々にとって、特別の意味を
持っていたに違いありません。

このように第八戒は、イスラエルの歴史を背景に、
兄弟や隣人の自由を奪うことを禁じています。自ら
も奴隷を体験し、解放の恵みを受けたイスラエルの
人々が、その恵みの中で、イスラエルの人間を誘拐
して奴隷化するはずがないのです。

奴隷は主人の財産であっても、その所有権を守る
規定はない。奴隷の人格と権利が保証されていて、
その境遇を楽にしたり期間を短くする規定がある。
こういうイスラエル独特の奴隷制度は、この戒めを
出発点とするものです。

現代は奴隷制度こそありませんが、隣人を、神の
愛の中にある者として重んじないで、自分の利益の
ためだけに利用するということはないでしょうか。
あるとすれば、それも、第八戒に反する行為です。
社会的な現象だけではありません。私たちと隣人と
の生活の中でも問い続ける必要がある問題です。

2. (物を)盗んではならない

窃盗や強盗のように法律で罰せられる盗みだけでなく、キセル乗車、勤務時間中の怠けや私用電話、誇大広告や言葉巧みなセールスなど、やっと思いそうな盗みの種は沢山あります。手際がよいと見られるような盗みも、無いわけではありません。

他人の物だけではありません。自分の物だって、神から与えられた物を浪費すれば、神の前ではそれも盗みになりそうです。隣人も私も主が血を流して贖って下さった人であることを徹底的に知る必要があります。そのことを本当に知っていれば、隣人とその持ち物も、自分とその持ち物も、重んじるはずだからです。

3. 与えなさい

主イエスは、山上の説教の中で「何事でも、自分にしてもらいたいことはほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」と言われました。いわゆる黄金律です。主が教えて下さったこの律法解釈で第八戒を読んだのが、エペソ人への手紙の「盗みをしている者は、もう盗んではいけません。かえって、困っている人に施しをするため、自分の手をもって正しい仕事をし、ほねおって働きなさい。」です。

ここでは「盗みをしなくても済むように働きなさい」ではなく、「人に与えるために働きなさい」と教えています。一生懸命働くのは、自分のためではなく、自分より貧しい人を助けるためだ。余ったら助けるのではなく、働いて収入があるということが、^{そく}即人に与えることなのだ。ということです。

生まれながらの私たちは、自分を愛するようには隣人を愛することが出来ず、人を踏み台にしてでも自分が富みたいとさえ思います。しかしこの戒めが私たちに教えていることは、その反対のことです。私たちに、隣人の自由や持ち物を盗まないだけでなく、もっと積極的に、隣人に与え、困っている人を助けるような生き方を求めているのです。

真実の言葉

あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。 出エジプト20：16

人が罪を犯す場合、すなわち、証言しなければのろわれるという声を聞きながら 彼がそれを見ているとか、知っている証人であるのに、そのことについて証言しないなら、その人は罪の咎を負わなければならない。

レビ記 5：1

どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。 申命記19：15

あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。私たちはからだの一部分として互いにそれぞれのものだからです。

エペソ 4：25

裁判制度の誕生(出エジプト18：13-27)：

初めモーセは、霊的、軍事的な指導だけでなく、民事的な問題の解決にも、責任を負っていました。これではモーセも疲れるし、順番待ちの民も大変です。それを見て舅イテロは、こう助言しました。

民に代わって神の前に出るのはモーセの仕事。

民の宗教教育と道徳教育の根本もモーセの仕事。

「民全体の中から、神を恐れる、力のある人々、不正の利を憎む誠実な人々を見つけ出し、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として、民の上に立て(18：21)」て、小さい事件をさばかせ、大きい事件はモーセがさばく。

こうして裁判が制度化されて行きますが、裁判で真実を明らかにするためには証拠が不可欠であり、どうしても証人の証言が必要です。誠実な証言は、共同体成立の基本的条件だったのです。第九戒は、このような状況の中で与えられた戒めです。

1. 答えるはずがない

第九戒を語順通りに直訳すると「あなたは答えるはずがない。あなたの隣人に 証言を 偽りの。」となります。「答える」の原語アナーには、「法廷で~に不利な証言をする」という意味があります。イスラエルの法では、証人は告発者ともなるので、自分の利益のために隣人を罪人に仕立て上げる、という偽証が起こり得ます。第九戒ではまず(法廷で偽証をしないということを通して)、隣人の名誉を守ることが命じられているのです。

どんな犯罪でも、それを立証するためには、二人以上の証人の証言が必要でした(申命記19：15)。そして証言することを求められた目撃者が、証言を拒否したり、全部を語らなかつたりすると、神の前に罪を犯したことになる(レビ記 5：1)。もし偽証したことが分かると、被告に下された判決を、自らが受けなければなりません(申命記 19：16-21)。しかも証人としてかかわった罪人が死刑となった時は、証人が初めに手を下さなければなりません(同17：7)。このように証人の立場は非常に重いものだったのです。

2. あなたの隣人に

「隣人」というのは、自分以外の、共同体構成員のことです。共同体は、神が贖い出して下さった者の集まりです。お互い神の愛の中にある者として重んじ合っているなら、その「隣人」について偽証を行なって、「隣人」を損なうようなことをするはずがないのです。

エペソ 4：25でパウロは、この戒めに則った勧めをしています。ここではおもに「うそ」について戒めているのですが、やはりキリストにある一体性をその根拠として挙げています。

ヤコブ 3：9の「私たちは、舌をもって、神にかたどって造られた人をのろい」も、神が祝福をもって造られた隣人を呪うことは、神とその祝福とを冒瀆するものだ、と言っているのです。

3 . 偽りの証言を

箴言14：25に「誠実な証人は人のいのちを救い、偽りの証人は人を欺く（現代訳）。」とあります。

「誠実な証人」というのは、ただ事実をあけすけに言う人のことではなくて、いのちを救う人のことだということです。事実を何でもかんでも言うてしまうことは、人を傷つける冷たいことで、人のいのちを救いはしません。

偽証を禁じるこの戒めも、偽証を行なって、隣人の名誉を傷つけたり信用を失わせたりしてはいけないとは言っていますが、隣人が損なわれてもいいから自分の真実を貫けとは言っていないことに、留意する必要があります。隣人の名誉が守られるように努力することに重点が置かれているのです。

4 . 偽証だけか

第九戒で直接的に禁じられているのは、法廷での偽証ですが、人は、日頃うそをつきながら一時だけ正直になる、ということなど出来ません（箴言10：31 - 32）から、第九戒は、法廷での在り方を教えながら日常生活での在り方をも間接的に教えている、と受け止めるべきです。

ジュネーヴ教会信仰問答も「隣人のことを偽って中傷してはならないという全般的な教えが、偽証を禁じる教えのもとに含まれている」と教え、「悪口や中傷を言うことに慣れた人は、機会が与えられるとやすやすと偽証する」と述べています。法廷での証言と日常生活の中での言葉は、真実を語るべきだという点で共通のものがあるのです。隣人に対していつも真実の言葉を語っている人だけが、法廷でも真実の証言を出来るのです。

こう見てくると、1998年が大変な年であったことが分かります。政界や官界や財界で、指導的な立場の多くの人が、違法行為を指摘されても白を切り、やがて逃げ切れなくなって頭を下げました。決して他人事ではなく、そういう弱さを私も持っていること知らされた一年でした。

欲しがる罪

あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。 出エジプト20：17

それでは、どういうことになりますか。律法は罪なののでしょうか。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。しかし、罪はこの戒めによって機会を捕え、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。ローマ 7：7-9

むさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。

コロサイ 3：5

むさぼる者 これが偶像礼拝者です。

こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。エペソ 5：5

欲しがる罪：

第六、七、八、九戒は、思いにまで遡って戒めてはいても、その表現は、殺人、姦淫、盗み、偽証、という具体的行為に現われた罪を中心にしたものでした。それに対して第十戒は、「欲しがる」という人間の罪の思いそのものを戒めています。

バブル景気の頃、エコノミック・アニマルという言葉で、日本の経済至上主義が非難されたことがあります。特に東南アジアへの経済進出については、日本人の歩いた後には草も生えない、とまで言われました。「金持ちと灰皿は溜まれば溜まるほど汚くなる」という諺通りに、国を挙げて「欲しがる罪」を犯してしまったのです。

1. 隣人の

第九戒に続いて、「隣人」という言葉が出てきます。前章では「隣人」を、自分以外の共同体構成員と説明しました。そうには違いないのですが、良いサマリア人の話の中での「この三人の中でだが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか(ルカ10：36)。」という御言葉が気になります。ここで「隣人」と呼ばれているのが、「強盗に襲われた者」ではなく、彼を救ったサマリア人だからです。

話は変わりますが、戦後(と言っても半世紀も前のことですが)、日本に、人権という言葉が入ってきました。当時中学生だった私も、この言葉に感激したものです。しかし今思い返してみると、当時は自分の人格が守られることが人権尊重でした。

それが十戒では、隣人の人格を守ることが、人に対する人の在り方として、求められているのです。つまり「神を愛する=神を神として畏れる」ことと「隣人を愛する=隣人の人格を重んじる」ことが、十戒の二本柱となっているのです。欧米の隣人愛や人権思想はこの二本柱が具体化されたもので、戦後の日本は、そのことを正しく受け止めなかったし、残念ながら今も、受け止めてはいないようです。

2. 家

「家」の原語ヘブライ語は、建物としての家だけではなく、そこにいる人間や財産などのすべてを含んだ抽象的表現です(創世記15：2、ヨブ記8：15)。だからここでは、その説明として「隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のもの」と言っているのです。

この戒めは表面的には、隣人の「家」を欲しがる心の動きに焦点を当てています。自分の物でない物を欲しがる罪の思いが無ければ、他の戒めに対する不従順も起こり得ません。だからこの戒めは、あらゆる不従順の本質に迫っている、と言えるのです。そのためこの戒めは、第一戒と並んで、最も重んじられる戒めとされてきたのです。

3. 欲しがってはならない

「欲しがる」の原語ハーマドは、「奪い取るために留め金をはずす」という意味もあって、「みだりに欲しがって、奪おうと企む」ことを表わします。ですから「欲しがる」と訳すよりも、「むさぼる」とか「貪欲」と訳す方が原意に近いと言えます。

列王記21章でナボテのぶどう畑が王に奪われる物語や、サムエル記11章でウリヤの妻が王に奪われる物語などは、「むさぼり」の結果と言えます。つまり「むさぼり」は、特定の行為を指すよりも、その源というか、動機としての思いを言うのです。

律法を真剣に実行しようと思うまで、パウロは、表面的な行為という点では、律法は完全に守れると思っていました（ピリピ 3：6）。ところが「むさぼってはならない。」という、思いにまで遡る戒めに真剣に取り組むことによって、自分の罪を痛感させられたのです（ローマ 7：7-24）。

「むさぼり」は「欲しがる」だけにとどまらず、欲しいと思ったら盗みも偽証もしかねないほどに、私たちを支配してしまいます。「むさぼり」に取り付かれると私たちは、欲しいという欲望に支配されて、神の支配から切り離されてしまいます。だからパウロは、「むさぼり」を偶像崇拜と呼ぶのです。

4. あなたの隣人の家を欲しがってはならない。

主イエスは「どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです（ルカ12：15）。」と教えられました。

私たちは、生きるのに必要な物を神に委ねるのが不安で自分で確保しようとする、今持っていない物が欲しくなり、一度この不安に取り付かれると、次から次へと不安の種が出てきます。

「あなたの宝のあるところに、あなたの心もある（マタイ 6：21）」のです。問われているのは何に信頼して生きるかです。神に信頼するのでなければ「欲しがる罪」の連鎖から抜けられないのです。

キリストの律法

イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはいたいと思うなら、戒めを守りなさい。」彼は「どの戒めですか。」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」 マタイ19：17-19

だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな。」という戒め、またほかにもどんな戒めがあっても、それらは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」ということばの中に要約されているからです。愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします。 ローマ13：8-10

1. 十戒を与えられるまで

(1) 「全地に散らされる」

初め人は「一つの話しことば(創世記11：1)」でした。そのとき人は、神抜きの心で思い計るままに、力を結集して、「塔」を建てようとしていました。しかし、神の介入(審き)により、もくろみはくじかれ、人は、ことばを混乱させられて、地の全面に散らされました(同11：6~9)。

(2) 「あなたによって祝福される」

人の罪の姿があらわにされたわけですが、神は、この審きの中に、すでに救いへの道を備えておられました。それが選びの民アブラハムの誕生です。神は「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される(同12：3)。」と約束されて、アブラハムを約束の地カナンに導かれました。

(3) 「エジプトの国、奴隷の家から」

アブラハムへの召しは、イサク、ヤコブと更新され、ヤコブ一族は、エジプトに売られて行ってパロに仕えたヨセフを頼って、エジプトに移住します。やがて、イスラエルの民が国家となるのにふさわしく成長した時、神は「エジプトの国、奴隷の家から(出エジプト20：2)」民を救い出されました。

(4) 「聖なる国民となる」

神はシナイ山で、御前に集まったイスラエルの民に「わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中にあつて、わたしの宝となる。わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる(同19：5-6)。」と仰せられ、契約を結ばれました。神の民イスラエルの誕生です。

(5) 「あなたの神、主である」

十戒は「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である(同20：2)。」という恵みの御業の宣言で始まります。このように十戒に代表される律法は、神がご自身と恵みの御業を顕わされ上で、それに民が応えることを求めて与えられたものです。ですから、「まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら(同19：5)」という条件も、単なる盲従ではなく、贖い出された神の民が、感謝しながら恵みに応えて生きることを求められているのです。

2. 律法主義の台頭

民は、預言者の厳しい警告にも関わらず、次第に律法から離れていきましたが、前6世紀の南ユダ王国の滅亡で祖国を離れると、居留地での宗教生活の中心に、律法を置かざるを得なくなりました。このとき律法学者という専門家階級が生まれます。

一方パリサイ派は、前2世紀にハスモン家が支配を確立した頃、手工業者階級の熱心な律法研究者を中心に起こったと考えられています。

主イエスが偽善者と非難された「律法学者やパリサイ人」は、こうして台頭してきました。

3．主による律法主義非難

律法主義への主の非難を福音書から見ますと、律法主義は、内側の思いには触れずに、外面的・形式的なことに終始している。

従って道德面より儀式面に関心が集中しており、その義務さえ守ったら、それで満足している。

彼らの律法遵守は見せかけで、神の定めた律法より、自分たちの定めた細則を重視している。

が、その焦点となっています。

主が「あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません（マタイ 5：20）。」と言われたのは、だから、律法を否定してのことではなく、この自己満足を非難してのことなのです。

4．キリストの律法

律法は、がんじがらみで、否定的で、堅苦しく見えるかも知れません。でも恵みの御業の宣言に続けて示された十戒の、真の目的は、主の言われる第二の戒め「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ（マタイ22：39）。」なのです。

私たちは、「お互いに愛せよ。」と言われただけでは、まず自分を愛して欲しい、まず自分を助けて欲しい、と思うほどに罪深いのです。だから主は、「自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい（同 7：12）。」と言われるのです。自分が愛されたいように隣人を愛し、自分が助けられたいように隣人を助けるべきなのです。

どうしたら、そんなことが出来るのでしょうか。主の第一の戒め「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ（マタイ 22：37）。」がそれを教えます。神を愛したら、主に倣って自分や隣人を見ることができ、自分を愛するように隣人を愛せるようになる、というのです。出来るか出来ないかではなく、御言葉に従い続ける道が開かれていることが福音です。だから十戒は、キリストの律法（ガラテヤ 6：2）なのです。